〈研究ノート〉

舞鶴市立赤れんが博物館所蔵楔形文字刻印煉瓦

大 江 節 子

Setsuko OH'E : A Brick Inscribed with Cuneiform in World Brick Museum of Maizuru

舞鶴市立赤れんが博物館は煉瓦および煉瓦の建物に関する情報を蒐集しており，メソポタミアから出土した品々も収蔵している．この中に，シュメール・ウル第三王朝第3代王アマル・スエン銘の楔形文字刻印煉瓦があり，このたび，博物館からこの煉瓦の出版許可をいただいた．ここに，写真および楔形文字の手写・翻字・翻訳を付して紹介したい．

キーワード：煉瓦碑文　シュメール　ウル第三王朝　アマル・スエン王　エリドゥ　アブズ神殿

1993年に開館した舞鶴市立赤れんが博物館は「煉瓦」をテーマにした博物館で，他地域の煉瓦とともに，楔形文字が記された数個の粘土釘と煉瓦を所蔵している．その一つ（収蔵番号349）は，附録した写真に見られるような，縦27cm，横26.5cm，幅6cmからなる，ほぼ正方形の焼成煉瓦で，表面および右側面に楔形文字が記され，裏面には所々ビチュメン[1]が付着している．

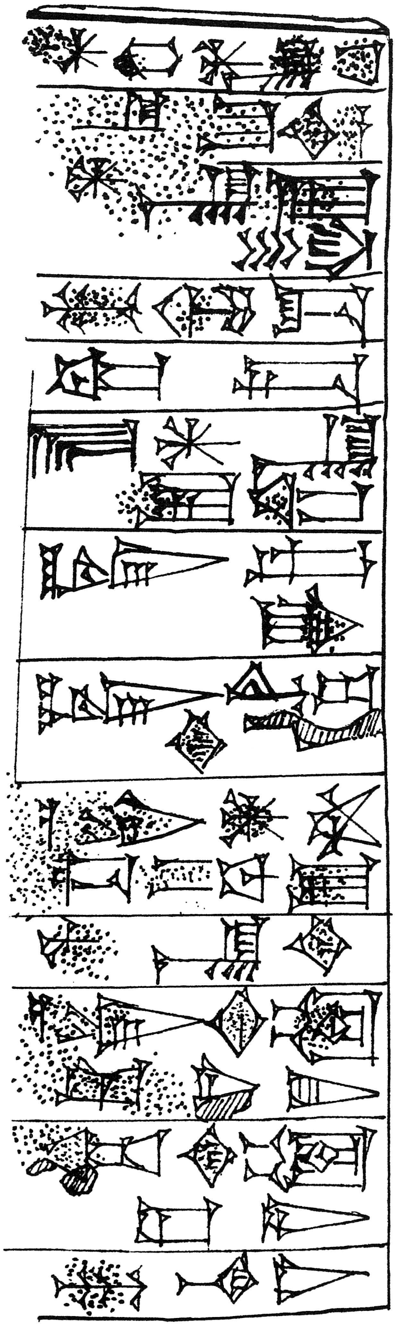
木や石はほとんどないが泥はそこら中にあるメソポタミアでは，建物の最もポピュラーな建築資材は泥煉瓦であり，壁，床はもちろん，屋根さえ多く泥が使用された．

ここで古代メソポタミアの煉瓦について概観すると，日干煉瓦は，すでに前8千年紀末頃からイェリコや西アジア各地で使用され始めたということであり[2]，焼成煉瓦はメソポタミアでウルク期[3]頃から使用され始めている．ウル第三王朝時代[4]には大量に使用されるようになった．焼成煉瓦は日干煉瓦よりも水に強いため，防水を目的として使用されることが多く，ビチュメンとともに用いられることが多かった[5]らしい．さらに，王家やそれに類する建物に使用される焼成煉瓦には，しばしば施主の称号や建造物の名前が刻印されたということである[6]．

煉瓦の形やサイズは時代とともに変化した[7]．初期の煉瓦は長くて薄く，前4千～前3千年紀にはほぼ比率1：2の長方形が一般的となり，初期王朝時代[8]にはいわゆるプラノ・コンヴェックスが流行った．しかしアッカド時代[9]以降は徐々に正方形のものを使用する傾向になった[10]ようである．また，岡田保良氏によれば，煉瓦の形は初期の事例を別にすれば，メソポタミアの煉瓦は正方形，周辺地域は長方形が普通である[11]という．

では，アマル・スエン銘のある煉瓦の楔形文字の手書きコピーと，ローマ字への翻字，日本語訳を記す．

［表］



1） ^{d}Amar-^{d}EN. ZU

2） Nibru^{ki}-a

3） ^{d}En-líl-le

4） mu pà-da

5） sag- ús-

6） é-^{d}En-líl-ka

7） lugal-kalag-ga

8） lugal-Uri$_{5}^{ki}$-ma

9） lugal-an-ub-da-límmu-ba-ke$_{4}$

10） ^{d}En-ki

11） lugal-ki-ág-gá-ni-ir

12） Abzu-ki-ág-gá-ni

13） mu-na-dù

1-4）アマル・スエン，エンリル神がニップルにおいて召命された（者）

5-9）エンリル神の神殿を支える者，強大な力を持つ王，ウルの王，四方世界の王は，

10-11）最愛の主たるエンキ神のために，

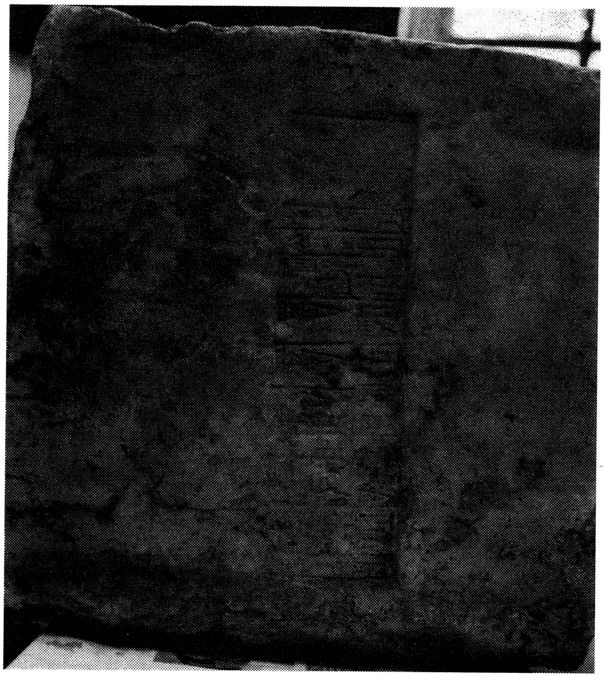
12-13）最愛のアブズ（神殿）を彼のために建造した．

［右側面］

写真でわかるように，ごく少数の字に僅かに異なった字体があるが，表と同じ文章が記されている[12]。

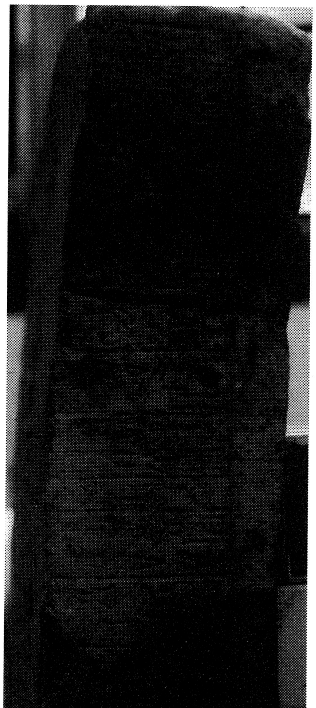
舞鶴市立赤れんが博物館所蔵楔形文字刻印煉瓦

［表面］



［表面の碑文］

［右側面］



アマル・スエンはシュメール・ウル第三王朝第2代王シュルギ[13]の息子である．シュメール王朝表に拠れば，アマル・スエンは第3代王として9年間王位にあった．しかし，治世6，7年頃から，次王となるシュ・シンと軋轢が生じていたようであり，アマル・スエン治世中にシュ・シンも王を名乗っている．さらに，ウル第三王朝5王のうちアマル・スエンにだけ王讃歌が残されておらず，その代わりに，2枚の異常なテキストが残されている[14]．

後世の占い文書でも不運な王として記されている[15]ところなどを勘案すると，アマル・スエンは政争に敗れた不運な王として後世の記憶に残ったのかもしれない．

ミハロウスキP. Michalowskiが指摘した2枚の普通でないテキストに拠れば，アマル・スエン王治世1年目，エリドゥのエンキ神殿は廃墟となっていた．王は神殿を保護する義務があるにも拘わらず，アマル・スエンはその責務を果たすことができず，放置したまま治世7年目となった．神殿のないエンキ神は，とうとうこの神殿について彼に注意した．8年目にしてやっとアマル・スエンは神殿の再建に取り掛かり，9年目に神殿を完成した，とある．

本稿の，舞鶴市立赤れんが博物館所蔵の煉瓦碑文は，上記ミハロウスキのテキスト内容と何か現実に交錯するところがあるか不明であるが，既述した翻訳からわかるように，この煉瓦は，アマル・スエンがエリドゥのエンキ神殿アブズ[16]を建造したことを記した碑文である．

筆者は，この煉瓦碑文が舞鶴市立赤れんが博物館に収蔵された詳しい経緯を知らないが，これは，フラインDouglas R. Frayneが『メソポタミアの王碑文：初期　ウル第三王朝（2112—2004BC)』[17]に収録している，アマル・スエン王の13行煉瓦碑文[18]のデュープリケイトであると思われる．

アマル・スエン銘の13行煉瓦碑文は，現在のところロフタスW.K. Loftusやテイラ－J.H. Taylorによってウルやエリドゥの発掘で齎された21個のデュープリケイト，ホールH.R. Hallによるエリドゥの発掘で齎された15個のデュープリケイト，出土地不明のもの11個，その他，合計55個のデュープリケイトがフラインによって上記メソポタミアの王碑文集成　アマルスエン15に蒐集されている．これら55個が収蔵されている博物館は，大英博物館36個，イェール大学バビロニア・コレクション2個，ペンシルヴァニア大学博物館5個，バグダッドのイラク博物館1個，ヴァンクーヴァーのブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館2個，カリフォルニア大学Ph. ハースト人類学博物館1個，ヴェルモント大学R.H. フレミング博物館1個，ライデン大学1個，その他個人所蔵などが6個となっている．寸法は，最大の煉瓦で27.5×27×7.5，最小の煉瓦で8.5×5×6.5であり，25～27㎝四方の煉瓦が最も多い．

舞鶴市立赤れんが博物館所蔵楔形文字刻印煉瓦は，フラインが蒐集しているアマル・スエン15の13行煉瓦碑文に加えられるものであろう．

なお，出版を許可くださった舞鶴市立赤れんが博物館に対して，また当博物館が楔形文字刻印煉瓦等を所蔵している旨ご教示くださった鳥取県立青谷高等学校元校長若木剛先生に御礼申し上げます．

註

1）瀝青

2）日本オリエント学会編『古代オリエント事典』814-15頁「煉瓦」

3）紀元前4千年紀後半（前3500—3100年頃）

4）紀元前21世紀のおよそ100年間（前2112？—2004？年)，メソポタミア最南部に位置するウルを首都としてシュメール人が統治していた王朝．

5）註2）参照

6）Roaf, M., “Palaces and Temples in Ancient Mesopotamia”, in Sasson J.M. (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East* I, New York, 1995, p. 424.

7）*Loc. cit.*

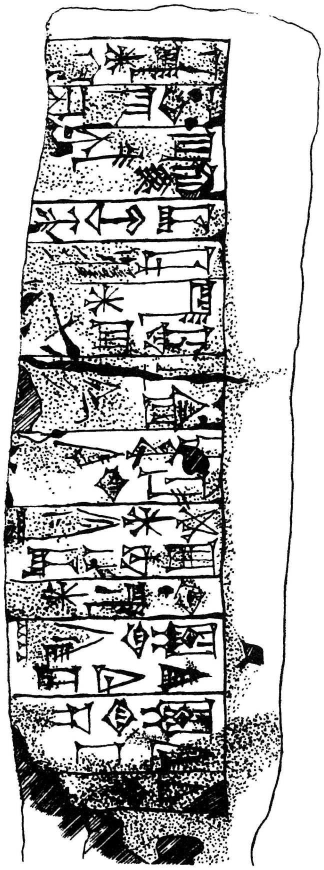
8）前2900—2350年頃

9）前2350—2100年頃

10）35センチメートル四方のものが一般的であったらしい．Roaf, M., *loc. cit.*

11）註2）参照

12）右側面の手書きコピーを記す



13）第1代王ウルナンム（前2112？—2095？年），第2代王シュルギ（前2094？—2047？年），第3代王アマル・スエン（前2046？—2038？年），第4代王シュ・シン（前2037？—2029？年），第5代王イッビ・シン（前2028？—2004？年）．

14）Michalowski, P., "Amar-Su'ena and the Historical Tradition", in Ellis M. de J., (ed.), *Memories of the Connecticut Academy of Arts & Sciences* Vol. XIX: *Essays on the Ancient Near East in Memory of Jacob Joel Finkelstein*, Hamden Conn., 1977, pp. 155–157.

15）Goetze, A., "Historical Allusions in Old Babylonian Omen Texts", *Journal of Cuneiform Studies* Vol. 1, New Haven Conn., 1947, pp. 253–266, esp. p. 261; Starr, I., "Notes on Some Published and Unpublished Historical Omens", *ibid.* Vol. 29, 1977, pp. 157–166, esp., 160–162.

16）ウルのエリリが建造し，次いでウルナンム，シュルギ，アマル・スエン，さらにヌル・アダドなどが再建を行っている．George, A.R., *House Most High: The Temple of Ancient Mesopotamia, Mesopotamian Civilizations* 5, Winona Lake, Indiana, 1993, p. 65 no. 30参照．

17）Frayne, D.R., *Ur III Period (2112–2004BC), The Royal Inscriptions of Mesopotamia Early Periods* Vol. 3/2, University of Toronto Press, Toronto Buffalo London, 1997.

18）*Ibid*., pp. 260–262 no. 15.